
黒い招待状

なんじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒い招待状

【Nコード】

N2283A

【作者名】

なんじ

【あらすじ】

なぜ平次は、黄昏の館の招待に欠席したかに迫る、問題作（^^）

探偵は、わずかな異変も見逃さない。 < b r >

平次は、平静を装っている母親の体の周りに、 < b r >

昨日から、微かな緊張が漂っているのを感じていた。 < b r >

そして今日、明らかな異変が起こった。 < b r >

< b r >

いつもの火曜日なら、出かける時に玄関で待っている、 < b r >

あの半透明のゴミ袋が無い。 < b r >

平次はさりげなさを装って言った。 < b r >

「今日、ゴミほからんでええんか？」 < b r >

「お父さん、氣イむいたからて、持ってつてくれたからええよ」 <

b r >

明らかな嘘である。あの親父が「氣が向いて」ごみ袋など持って行

く訳が無い。 < b r >

何か、ある。 < b r >

< b r >

何かは、やはりゴミ袋の中にあつた。 < b r >

ゴミは、平次の家から離れたゴミ捨て場にわざわざ捨ててあつた。

< b r >

しかし探偵としての探索能力は、我家のゴミを見逃さなかった。 <

b r >

「オカンの奴。いつも、ゴミ捨ての時、

< b r > 俺が、『蓬菜の肉まん黙って食つたらう？』 < b r >

なんて、ゴミ見て指摘するもんやから、用心したな？ < b r >

せやけど、その用心裏目に出たわ。 < b r >

なんとしてでも、オカンが俺に隠そうとした秘密を見つけてやるわ

” < b r >

< b r >

ゴミ袋を破らないようにして中をあさる。 < b r >
そんな平次を見つめる、通りすがりの人々の目は冷たかった。 < b r >

しかし謎を追いつめようとするキラキラの平次には、 < b r >
そんなものは、無いも同然だった。 < b r >

平次は、細かくちぎられた黒い紙を見つけた。 < b r >
明らかに、普通の紙では無い。上等な紙だ。 < b r >

カンハ、それが目的の物だと告げていた。 < b r >
平次は、ゴミの中に散らばる < b r >

すべての切れ端を集めてから、
ゴミ袋をきちんと閉め、ゴミ捨て場を後にした。 < b r >

< b r >
平次は学校で紙片のジグソーパズルに熱中した。 < b r >
一度は、和葉が寄って来て何か話し掛けようとした。 < b r >

しかし、無視すると、何も言わずに去っていった。 < b r >
< b r >

和葉は平次が事件に夢中になるあまり、
< b r >自分がどんな匂いを発散させているか、 < b r >
解っていない、と気づいた。 < b r >

そこで、注意しようとしたのだが、平次に和葉の声は入らないよう
だった。 < b r >

"ま、ええか。これで、平次にちよつかいかける女の数が減るわ"
< b r >
< b r >

"神が見捨てし仔の幻影やて！あの、キザ野郎！" < b r >
叫ぶと、平次は立ち上がった。 < b r >

教室の皆、教師も含む、が、一斉に平次の方を見た。 < b r >
「すみません、気分悪いんで早引けさせて下さい」 < b r >
ダメもとで、平次は教師に頭を下げた。 < b r >

「ええよ、早ようお帰り」 < b r >

教師は、あつさりと承諾した。 < b r >

教室から飛び出す、平次の背中に教師が声をかけた。 < b r >

「帰ったらすぐ、風呂入りや！」 < b r >

教室に爽やかな空気が戻って来た。 < b r >

< b r >

形相を変えて、居間へ飛び込んできた平次を、静香は、平然と迎えた。 < b r >

「おや、えらい早いお帰りで」 < b r >

「オカン！何で俺への事件の依頼を捨てたんや！」 < b r >

「依頼やないで。招待状や。」 < b r >

もう断り入れたさかい、心配せんでええ。 < b r >

それに、電話で確認したんやけど、あの毛利ハンもいかはるそうや。

< b r >

若輩モンのあんたが出張る必要は、これっぽちも無いで。 < b r >

あんたの、すべき事は、試験勉強や」 < b r >

「そんなもん、この件終わってからで充分や！俺は行くで！」 < b

r >

「ほうか、ほな、勝負するしかない様やな」 < b r >

静香は端然と立ち上がった。 < b r >

< b r >

「平次、ズルは許さんで。新聞は二十枚や」 < b r >

「アホか。この日は紙面が少ないんで足しとんや。」 < b r >

オカンこそ、こないだみたいに芯に木の棒入れたらあかんで」 < b

r >

二人は、ひたすら、新聞紙を固く丸める事に力を注いだ。 < b r >

< b r >

二人は、庭に降り立った。 < b r >

向かい合い、互いに丸めた新聞紙を構える。 < b r >

一陣の風が二人の間に吹いた。しかし、二人は微動だにしない。 <

b r >

と、急に静香の緊張がほどけた。 < b r >

平次が打って出ようとするより先に静香が大声をあげた。 < b r >

「あら？和葉ちゃん、どないしたん」 < b r >

平次は思わず、屋敷の方を見た。誰もいない？！ < b r >

「隙あり！」 < b r >

平次を、力の限り固く丸めた新聞紙の棒の乱れ撃ちが襲った。 <

b r >

< b r >

平蔵が、部屋に入ってくる気配がした。 < b r >

平次は背中を向けたまま、寝たふりをしていた。 < b r >

しかし平蔵は、それに気づいている様だった。 < b r >

「あの招待状を、見た時から、いつかこないな日が来ると思うとつたが・・・」 < b r >

枕元に、何かが置かれた。 < b r >

平蔵が、立ち去って、しばらくしてから、平次は苦勞しながら起き上がった。 < b r >

体中が痛む。 < b r >

「何や？これ？」 < b r >

平次は紙袋をひっくり返した。 < b r >

中から、シップ薬、打ち身の薬、筋肉痛用の塗り薬が、何種類も転がりてきた。 < b r >

「あ、あん親父。人を馬鹿にしゃがって！」 < b r >

平次は、力いっぱいこぶしで畳を殴りつけた。 < b r >

すでに打ち身のあつた右こぶしは、その酷使に耐え切れず悲鳴をあげた。 < b r >

そして平次も叫んだ。 < b r >

「痛ええええ！」 < b r >

< b r >

こうして、全身打撲、及び右第三指の骨折によって、 < b r >

西の名探偵は、黄昏の館からの招待を欠席する事になったのであつ

た。

(おわり)

（後書き）

（なんじのたわ言）

まあ、こんなお話でして

格好いい平次君が好きな方にはごめんなさいm（――）m。
しかし、あれほど意味ありげな招待を、

平次君が「中間試験」などを理由に

断るのは、あまりにもおかしいと考えまして（^^）
こんなお話になりました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2283a/>

黒い招待状

2010年12月2日17時31分発行